

背景

アメリカでは州ごとに教科書候補リストに載せる条件として、その教科書が生徒にとってわかりやすく使いやすいものになるよう改善の手順を踏むことLVR(Learner Verification & Revision)を義務づけている州が多くある。

形成的評価と総括的評価

形成的評価

教材作成者が作成中にその教材の効果を確かめ、改善することを目的とした評価

システム的アプローチ PLAN→DO→SEEでいえばSEEにあたり、SEEからPLANへフィードバックし修正をするための評価である。評価の観点やデータの取り方は後述する「学習者検証の原則」に従って行われる。

総括的評価

作成者以外の者が完成した教材を採用するかどうかを判断するための評価。

学習者検証の原則

教員や専門家の視点からではなく、実際の学習者にとってわかりやすく使いやすい教材であったか、何をどの程度学べたかなど、学ぶ側の立場からデータを集め、その効果を検証し、その教材の善し悪しの判断する原則。

形成的評価の3ステップ

学習者検証の原則に従って行う形成的評価には3つのステップがある。

①第一段階 1対1評価

教材を使う人1人に対して1人がその進行状況を評価する。教材が独学用の教材として成り立っているかを検証する。第7章の「形成的評価の7つの道具」(p 101～104)はこの1対1評価の具体的な内容を示している。学習者の個人差を考慮し数人に対して1人ずつ1対1評価を行うことや、教材の改善を加えるたびに2人目3人目の1対1評価を行う形がある。

②第二段階 小集団評価

小集団の学習者に対して一斉に教材を与え、独学が可能かどうかさらに確かめる。小集団評価の結果で学習効果全体の傾向がつかめる。ほとんどの者が問題なく使用できる教材であれば次の段階に進めるが、そうでなければ第一段階の1対1評価に戻り、改善し直す。

③実地テスト

教材を実際に使う場面において実用に耐えられるかどうかを確かめる。第二段階までの特定の条件下における評価ではなく、現実の場面において何か問題はないかチェックをする。評価は制作者ではなく、他の人に行ってもらおう。いわゆるモニターテストであり、誰が使っても問題はないかを確かめると同時に宣伝効果を兼ねている。

1対1評価実施の留意点

形成的評価はどのように行うかによって、得られるデータの量と質にも影響を与える。1対1評価における注意点をあげる。

- ・リラックスした雰囲気づくり
- ・評価は教材改良のためであることを理解してもらう。
理解できないのは学習者が悪いのではなく、教材そのものに問題があるということ。
- ・できるかぎり手や口を出さない。手や口を出したら必ずその記録をとる。
まず独学用教材であることを事前に説明しておく。何か補足をしてしまった時点で独学用教材として成立していないことを意味する。
- ・一通り終わったところで、もう一度教材を振り返る。
ページをめくりながら、それぞれの箇所での学習者がどう思い、どう感じたかをきく。
- ・振り返りをしながら、改善点などのアイデアを学習者からだしてもらい、改善点を見つける。
- ・協力していただいた方に感謝を表す。(協力者の氏名を教材に載せるなど)